

小学校教師が生じさせている可能性のある ヒドゥン・カリキュラムと教職経験年数・担当学年 の経験回数・担当学級の経験回数との関連

Relationship between the hidden curriculum that elementary teachers may have created and the number of years of teaching experience, the number of experiences in the class in charge, and the number of experiences in the class in charge

小杉奏
Kanade KOSUGI

常葉大学教育学部初等教育課程数学専攻
Faculty of Education, Tokoha University

<あらまし> 本研究は、小学校教師が意識して実践しているヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動の実態を教職経験年数・担当学年の経験回数・担当学級の経験回数の違いから検討することを目的とした。教職経験年数、担当学年・担当学級の経験回数別の有意差を見るため、質問項目ごと一要因参加者間分析を行なった結果、(1)若手の教師はヒドゥン・カリキュラムが与える影響を考え、ヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動を意識して実践すること、(2)高学年の教師は児童の発達段階を考え、他学年以上にヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動を意識して実践すること、(3)1年生の教師は低学年の中で特にヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動を意識して実践すること、(4)一人一人の教育的ニーズに応じてヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動をとること、がそれぞれ必要であることが示唆された。

<キーワード> 小学校教師, ヒドゥン・カリキュラム, 学級経営, 学級担任

1. はじめに

1990年代頃から「学級崩壊」や「静かな荒れ」といった課題が見られ、学級経営の向上が目指されている。板井(2012)は、ヒドゥン・カリキュラムの影響力の大きさが学校教育の現場で無視できない重要な課題であると指摘している。また横藤・武藤(2014)は、ヒドゥン・カリキュラムは教師本人には気が付きにくく、なぜか分からないままに学級が荒れていくと指摘している。このことから学級経営にはヒドゥン・カリキュラムが影響すると考えられる。

本研究でのヒドゥン・カリキュラムは、森田(2005)に依拠し「教師が意図も意識もしないままに結果的に教えてしまっている内容」と定義する。また、ヒドゥン・カリキュラムは良い影響を与えるものと悪い影響を与えるものが見られるが、前述の横藤・武藤(2014)

の指摘から、本研究におけるヒドゥン・カリキュラムは生じさせない方がよいものとする。

これまでのヒドゥン・カリキュラムに関する先行研究には、ジェンダー問題に関する研究(例えば、氏原(2009))、小学校以外の教育現場での研究(例えば、板井(2012))が見られる。しかし、小学校教師を対象としたヒドゥン・カリキュラムに関する意識の実態を調査した研究はまだ見受けられない。

近年、教育公務員特例法が一部改正されたことにより、各自治体ではキャリアステージに応じて標準的に修得することが求められる資質・能力を明確化した教員等育成指標が策定された。このことから、教職年数の違いによって教師の学級経営力も異なると考えられる。

文部科学省(2016)は、「発達の段階(低学年・中学年・高学年)を踏まえた学習・指

導の在り方」を示しており、教師は各学年の発達段階に沿った児童への対応が重要である。また、黒羽(2005)は、教師の信念は、教師の個人的体験を中核とする個人史を通して形成される自己概念が基盤にあり、基本的にその人のパーソナリティに根ざしていると述べている。このことから、教師の担当学年の経験回数は教師の意識や行動に影響していると考えられる。

以上のことから、教職経験年数の違いによるヒドゥン・カリキュラムに関する意識の実態を探ることで、初任期・中堅期・熟練期のうち、どの段階の教師がヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動をより意識して実践するべきか把握することができる。また、担当学年の経験回数の違いによるヒドゥン・カリキュラムに関する意識の実態を探ることは、ヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動をより意識して実践しているのは、どの学年を多く経験している教師なのかを把握し、各学年に合わせた対応を示唆することができるため意義のあることと考えられる。

そこで本研究では、小学校教師が意識して実践しているヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動の実態を教職経験年数、担当学年の経験回数、担当学級の経験回数の違いから検討することを目的とした。

2. 研究の方法

2.1. 予備調査

2.1.1. 時期及び対象

本調査で用いる質問紙の質問項目を検討のため、2020年1月上旬から中旬に、X小学校の教師32名を対象として、ヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動に関

する質問紙調査を行った。

2.1.2. 予備調査質問紙の作成

予備調査質問紙は、フェイスシート、質問項目の構成とした。質問項目は、ヒドゥン・カリキュラムに関する書籍3冊(横藤、武藤2014)、(横藤、武藤2016)、(多賀2015)を参考とした。フェイスシートは、教師経験年数を質問項目とした。小学校教師の経験を持つ研究者3名、X小学校の管理職1名、学級経営の研究に携わっている教師1名で3冊から質問項目となり得る内容を抽出した結果、106項目であった。これらを分類した結果、(1)環境29項目、(2)授業18項目、(3)授業外の学校生活6項目、(4)子供との関わり26項目、(5)教師27項目の5つの質問カテゴリに分類された。

質問は「各項目のヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動は必要だと思いますか」とし、回答は「4.必要だと思う=4点」「3.どちらかという必要だと思う=3点」「2.どちらかという必要ないと思う=2点」「1.必要ないと思う=1点」の4件法で行った。

2.1.3. 分析と結果

木原(2013)を参考に、対象者を初任期(1年~4年)、中堅期(5年~19年)、熟練期(20年~)の教職経験別に整理した。そして、経験別に質問項目ごと、平均点及び標準偏差を算出し、経験年数別による各項目への必要感の違いを検討した。

予備調査の結果、本調査質問紙の質問項目は、(1)環境15項目、(2)授業10項目、(3)授業外の学校生活2項目、(4)子供との関わり10項目、(5)教師6項目の計43項目となった(表1)。

表1: 本調査質問紙の質問項目

質問項目
カテゴリ1: 環境
1-1 教室に掲示しているルールを子供達に意識させること
1-2 生き物を大切に扱わせること(植物を含む)
1-3 教師が板書の誤字を見逃さないこと
1-4 電気を消させること(移動教室の際など)
1-5 必要ないときは、カーテンを束ねさせること
1-6 はがれかけた掲示物を放置しないこと
1-7 棚や教卓を整頓しておくこと
1-8 本棚の本やファイルは向き揃えてしまわせること
1-9 落ちているジャンパー類(上着)を片付けさせること
1-10 揃っていない机や倒れた椅子を整えさせること
1-11 前の時間の学習用具をきちんとしまわせること
1-12 提出物を決められた方法で出させること(提出場所、番号順等)
1-13 机から本やプリントをはみ出ないようにさせること
1-14 雑巾を決められたルール通りに掛けさせること
1-15 換気すること

カテゴリ 2：授業

- 2-1 時間通り授業を始めること
- 2-2 子供が理解できているかを確認すること
- 2-3 全員に共有したい気きはしっかり発表させること（例：「〇〇君、今の素敵な気きを立てて発表してください」）
- 2-4 忘れ物を申告させること
- 2-5 予告した時間（「〇分で書きましょう」など）を守ること
- 2-6 使ってはいけないもの（シャーペンなど）の使用についてダメな理由を説明すること
- 2-7 不適切な行動に注意ではなく、具体的行動を教えること
- 2-8 発問をして、すぐに答え返って来ない時、待つ時間を取る
- 2-9 子供の間違いをフォローすること
- 2-10 「後で」と言ったら、必ず後で発言させる機会を持つこと

カテゴリ 3：授業外の学校生活

- 3-1 朝の会・帰りの会をだらだらとさせないこと（時間通りに始まらないこと、私語等を容認しない）
- 3-2 帰りの会が長くなる場合、予告しておくこと（時間延長の意味や見通しを伝える）

カテゴリ 4：子供との関わり

- 4-1 授業中にあだ名・ニックネーム（呼び捨ても含む）を使わせないこと
- 4-2 子供同士のトラブルは、当事者の両方とも指導すること
- 4-3 長い時間説教をしないこと
- 4-4 曖昧な指導をしないこと（「丁寧に書こう」など）
- 4-5 子供をからかうことを笑いにしないこと
- 4-6 口が堅いこと（子供が秘密にして欲しいと言ったことを他の子供に言わない）
- 4-7 子供の目を見て話すこと
- 4-8 細かな反応をしながら聞くこと
- 4-9 お話ししやすい子供ばかりに頼まないこと
- 4-10 言うことがブレないこと

カテゴリ 5：教師

- 5-1 髪を整えること
 - 5-2 ポケットに手を入れないこと
 - 5-3 音がしそうな装飾品はつけないこと
 - 5-4 全校集会のとき、立ち位置に気をつけること
 - 5-5 怒鳴らないこと
 - 5-6 いつも笑顔でいること
-

2.2. 本調査

2.2.1. 時期及び対象

2020年9月下旬から10月下旬に、現在担任を持っている小学校教師を対象に質問紙調査を実施し、386名から回答を得られた。

2.2.2. 本調査質問紙の作成

本調査質問紙はフェイスシート、質問項目の構成とした。質問項目は前述の43項目とし、フェイスシートでは、教職経験年数、担当学年の経験回数、担当学級の経験回数を問う質問項目を設けた。

質問は「各項目を意識して実践していますか」とし、回答は「4.意識して実践している＝4点」「3.どちらかという意識して実践している＝3点」「2.どちらかという意識して実践していない＝2点」「1.意識して実践していない＝1点」の4件法で行った。

2.2.2. 分析の方法

はじめに、教職経験年数の違いによる分析を次のように行った。

(1)教職経験年数を、木原(2013)を基に、初任期(1～4年)、中堅期(5年～19年)、熟練期(20年以上)の3つの群に分類した。

(2)教職経験年数別の有意差を見るため、質問

項目ごと一要因参加者間分析を行った。

次に、担当学年の経験回数の違いによる分析を次のように行った。

(1)対象者の6年生の経験回数を0回、1～5回、6回以上の3つの群に分類し、経験回数別の有意差を見るため、質問項目ごと一要因参加者間分析を行った(1～5年生も同様に実施)。

(2)有意差が見られた項目のうち、「経験回数が多い教師の方が意識して実践している」と示された項目の数について、学年同士で比較した。

最後に、担当学級の経験回数の違いによる分析を次のように行った。

(1)対象者の特別支援学級の経験回数を0回、1～5回、6回以上の3つの群に分類し、経験回数別の有意差を見るため、質問項目ごと一要因参加者間分析を行った。

(2)有意差が見られた項目のうち、「経験回数が多い教師の方が意識して実践していない」と示された項目の数について通常学級(担当学年の経験回数の違いによる分析結果)と比較した。

3. 結果と考察

3.1. 教職経験年数別の差異

有意な差が見られた項目 20 項目のうち、教職経験年数が多い教師の方が意識して実践しているという結果が示された項目は 18 項目であった。

このことから、教職経験年数が多くなれば、授業力や学級経営力が向上し広く物事を捉えられるようになるため、教職経験年数が少ない教師より、ヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動を意識して実践できるようになり、ヒドゥン・カリキュラムも生じにくくなると考えられる。そして、若手の教師はヒドゥン・カリキュラムが与える影響を考え、ヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動を意識して実践することが必要であると考えられる。

3.2. 担当学年の経験回数別の差異

1 要因参加者間分散分析の結果、有意差が見られた項目数は、6 年生 22 項目、5 年生 16 項目、4 年生 12 項目、3 年生 2 項目、2 年生 3 項目、1 年生 10 項目であった。そのうち「経験回数が多い教師の方が意識して実践している」と示された項目数は、6 年生 11 項目、5 年生 11 項目、4 年生 7 項目、3 年生 1 項目、2 年生 0 項目、1 年生 5 項目であった（表 2）。

結果より、低学年・中学年に比べ、高学年が多くなっている。藤枝（2016）は、高学年は心理的にも不安定となり、親や教師と言った大人との間に心理的な距離が生まれることを述べている。そのため、反抗期・思春期の入り口である高学年の教師は、中学年・低学年の教師よりヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動を意識して実践しており、ヒドゥン・カリキュラムも生じにくくなると

表 2：有意差が見られた項目数と経験回数が多い教師の方が意識して実践している」と示された項目数

	有意差が見られた項目数	経験回数が多い教師の方が意識して実践しているという結果が見られた項目数
6年生	22	11
5年生	16	11
4年生	12	7
3年生	2	1
2年生	3	0
1年生	10	5

考えられる。そして、高学年の教師は児童の発達段階を考え、他学年以上にヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動を意識して実践することが必要であると考えられる。

低学年では、2 年生・3 年生に比べ、1 年生が多くなっている。藤枝（2016）は、最近では学級崩壊が小学校の低学年においても発生していると述べている。また、義務教育の始まりでもあることから、1 年生で良い影響を与え、2 年生・3 年生に繋げていくことが大切であると考えられる。そのため、1 年生でヒドゥン・カリキュラムを生じさせないよう徹底する必要がある。1 年生の教師は、2 年生・3 年生の教師よりヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動を意識して実践していると考えられ、ヒドゥン・カリキュラムは生じにくくなると考えられる。そして、1 年生の教師は低学年の中で特にヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動を意識して実践することが必要であると考えられる。

3.3. 担当学級の経験回数別の差異

特別支援学級の経験回数別の 1 要因参加者間分散分析では、7 項目で有意差が見られ、そのうち「経験回数が多い教師の方が意識して実践していない」と示されたのは 4 項目であった（表 3）。

結果より、通常学級に比べ特別支援学級が多くなっている。文部科学省（2013）は、児童生徒の実態等に応じて弾力的に教育の場を用意するという考え方に立って取り組むことが必要と述べている。一人一人の教育的ニーズに応じた柔軟な対応が求められるため、経験回数が多くなるほど、ヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動をあえて意識して実践しなくなると考えられる。このことから、特別支援学級の教師は一人一人の教育的ニーズに応じてヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動をとることが必要であると考えられる。

表3：有意差が見られた項目数と経験回数が多い教師の方が意識して実践していない」と示された項目数

	有意差が見られた項目数	経験回数が多い教師の方が意識して実践していないという結果が見られた項目数
6年生	22	1
5年生	16	0
4年生	12	0
3年生	2	0
2年生	3	0
1年生	10	0
特別支援	7	4

4. まとめと今後の課題

本研究は、教職経験年数、担当学年の経験回数、担当学級の経験回数の違いから、小学校教師のヒドゥン・カリキュラムに関する意識の実態を検討し、次の4つの結果が得られた。

- (1)若手の教師はヒドゥン・カリキュラムが与える影響を考え、ヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動を意識して実践することが必要であると考えられる。
- (2)高学年の教師は児童の発達段階を考え、他学年以上にヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動を意識して実践することが必要であると考えられる。
- (3)1年生の教師は低学年の中で特にヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動を意識して実践する必要があると考えられる。
- (4)一人一人の教育的ニーズに応じてヒドゥン・カリキュラムを生じさせないための行動をとることが必要であると考えられる。

本研究では、教職経験年数・経験学年・経験学級の観点から分析を行ったが、小学校教師のパーソナリティが小学校教師のヒドゥン・カリキュラムに関する意識の実態に関係していることも考えられる。今後は、パーソナリティの観点でも調査を行うことが課題である。

参考文献

板井孝彦郎 (2012) プロフェッショナリズム教育と、その実践の根底にあるもの-「隠れたカリキュラム hidden curriculum」-. 日内会誌 101：201-205

氏原陽子 (2009) 隠れたカリキュラム概念の再考：ジェンダー研究の視点から. カリ

キュラム研究 第18号：17-30

木原俊行 (2013) 授業研究と教師の成長. 日本文教出版株式会社

黒羽正見 (2005) 学校教育における「教師の信念」研究の意義に関する事例研究—ある小学校教師の教育行為に焦点をあてて—. 富山大学研究論集 No.8：15-22

多賀一郎 (2015) ヒドゥンカリキュラム入門—学級崩壊を防ぐ見えない教育力—. 明治図書出版株式会社

森田栄蔵 (2005) 「隠れたカリキュラム」『月刊生徒指導』. 第35巻5号

文部科学省 (2006) 人権教育の指導方法等の在り方について. 第1章第1節 3人権感覚の育成を目指す取組.

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/jinken/06082102/004.htm

横藤雅人, 武藤久慶 (2014) 『かくれたカリキュラム』 発見・改善ガイド. 明治図書出版株式会社

横藤雅人, 武藤久慶 (2016) 「管理職・主任のための『かくれたカリキュラム』 発見・改善ガイド」. 明治図書出版株式会社

藤枝静暁 (2016) 「使える」教育心理学. 北樹出版